

いもち病対策の徹底について

① はじめに

近年、夏期の天候不順により「いもち病」が発生する年次が増えています。この病害は種子伝染し、育苗時に発症すると本田での多発を招くことがあります。令和5年産水稻では以下のことに留意して管理しましょう。

また、良質米を安定生産するには、優良種子の安定生産が重要です。優良種子生産のためにも採種ほ周辺では病気を発生させない管理にご協力をお願いします。



苗いもち



葉いもち(急性病斑)



穂いもち

② いもち病の特徴

- (1) 苗いもち
種子消毒が不十分な罹病もみを播種すると発生します。発病苗を本田に移植すると、葉いもちの早期発生の原因となります。
- (2) 葉いもち
25℃前後で湿度が高く、夜露が切れにくい条件が続くと発生が多くなります。中心部が灰色の病斑(急性型病斑)を形成すると急速に被害が拡大するため早急な防除が必要です。
- (3) 穂いもち
病斑が上位葉に多く形成されていたり、出穂後に低温と降雨が連続すると穂いもちが発生しやすくなります。発生すると白穂となり、稔実が悪くなって収量や品質が低下します。

③ 防除対策

- (1) ばか苗病対策と同様に、環境整備や種子更新および種子消毒を適正に行ってください(裏面の防除対策を参照)。
- (2) 播種時や緑化期に薬剤による床土へのかん注を行ってください。ただし、微生物農薬を使用した場合は、混用や体系処理を避けてください。
【薬剤例】:ダコレート水和剤(播種時)、ベンレート水和剤(播種時~播種7日後頃)
- (3) 本田での耕種的防除および薬剤防除
 - 1) 発病を助長するため多肥栽培を行わないようにしましょう。
 - 2) 補植用の取り置き苗は、速やかに土中に埋没させて処分してください。
 - 3) いもち病が問題となっているほ場や地域では、本病に効果の高い箱施用剤を広域的に使用しましょう。
【薬剤例】:箱王子粒剤、Dr.オリゼアドマイヤー箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、エバーゴルフワイド箱粒剤、エバーゴルプラス箱粒剤、スタウトダントツ箱粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤 等
- (4) 本田で葉いもちの急性病斑(灰色)が認められる場合は早急に防除を実施しましょう。
- (5) 穂いもちの防除は、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を基本とします。出穂前に止葉などの上位葉に発病が認められる場合や、低温・多湿・日照不足などの天候不順が続く場合は、穂いもちが多発しやすくなるため特に注意しましょう。葉いもちを防除したり、効果の高い箱施用剤を使用して出穂前の上位葉に葉いもちの病斑が見られない場合は、穂ばらみ期の防除を省略できます。

ばか苗病の撲滅について

① はじめに

令和4年産水稻では、採種ほの周辺でばか苗病が発生する事案が認められました。万が一採種ほ産種子が汚染されると県内全域へ拡大する恐れがありますので、優良種子生産のためにも採種ほ周辺では病気を発生させない管理を心がけ、本病の撲滅にご協力をお願いします。



育苗中の症状



本田での症状



枯死した茎に形成された胞子

② ばか苗病の症状

育苗中は茎葉が黄化し、細く長く伸びて徒長します。本田移植後においても同様に黄化して徒長しますが、やがて枯死し株元を観察すると白色～桃色の胞子が見られます。枯死を免れたものは出穂期頃には健全株より著しく徒長します。

③ ばか苗病の伝染環

糸状菌(カビ)によって引き起こされ、主に種子伝染します。保菌種子が混入し、種子消毒が不完全な場合は、浸種～催芽時に健全種子に伝染します。本田で枯死すると株元に多量の胞子を形成し、風で飛散して開花期の籾に付着し、健全な種籾が保菌することになります。

④ 防除対策

- (1) 被害を受けた籾殻・稲わら・米ぬか等も伝染源となるため、育苗床やその周辺に放置しないようにしましょう。
- (2) 浸種～育苗に使用する施設は清掃し、育苗箱等の資材消毒を適正に行ってください。
- (3) 発病ほ場の自家採種が原因となります。自家採種を避け、種子を更新しましょう。
- (4) 以下を参考に比重選を実施し保菌もみを除去します。比重選後は水洗いしてください。
【例】硫安2.9kg/水10L(もちは1.9kg)
- (5) 種子消毒は以下を参考に適正に行ってください。
 - 1) 種子消毒は本病に効果の高い以下の薬剤を使用します。
【薬剤例】テクリードCフロアブル、ヘルシードTフロアブル 等
 - 2) 薬液の温度は10℃を下回らないよう注意してください。
 - 3) もみと薬液の容量は1：1以上とし、浸漬処理中は薬液を1～2回攪拌します。
 - 4) 温湯消毒の場合は60℃10分処理とし、1回の処理量が多すぎると消毒中の水温低下により防除効果が低下するため温度管理は厳重に注意してください。温湯消毒や微生物農薬のみの種子消毒では、ばか苗病に対して防除効果が劣りますが、これらを組み合わせた体系的な処理を行うと防除効果をより高めることができます。
 - 5) ベンレート水和剤による種子消毒は、耐性菌の報告があるため使用しないでください。
 - 6) 飼料用米やWCS用稲も種子消毒を徹底しましょう。
- (6) 浸種の際、もみと水の容量は1：2とします。水の交換は原則行いませんが、水温が高い場合や長期間浸種する場合は、酸素不足となるおそれがあるため静かに交換します。

⑤ 発生時の対応

- (1) 育苗中に被害苗を確認したら移植1週間前に抜き取ってください。その後も発生する場合は本田でも発生するので、採種ほとその周辺では苗として使用しないでください。
- (2) 本田で発病が見られる場合は、採種ほが出穂する前までに株ごと抜き取り、ほ場周辺に放置せず適切に処分するか、土中に埋没させてください。